

王と大地の黙示

作家と風土

岡田喜秋

西澤書店

空と大地の黙示 ©一九七五

定価二、〇〇〇円

昭和五十一年一月三十日 印刷
昭和五十一年三月二十八日 発行

著者 岡田喜秋

出版者 西澤楯雄

発行所 西澤書店

印刷 誠進社

製本 今泉誠文社

発売元 名著刊行会

東京都中野区松ケ丘一―二二―七
①一六五 電話三八六一六四四一

落丁、乱丁はお取替致します。

0093-000069-8312

空と大地の黙示——作家と風土——

風土と文学の關係

—序にかえて—

自意識、理性、合理主義、個人主義といういわゆる「近代的」諸理念が殊更に強調され、また強調される必要のある日本では、物事がこれらの諸理念に律して眺められがちになるわけであるが、しかし殊にたとえば文学のようなものはこれらの諸理念のみによって説明不可能なものをいくつも含んでいるのに、風潮というものの力は強く、文学は専ら合理主義やモラリズムの立場からのみ考察されて、文学の持っている非合理的な諸々の面は顧みられることなく打ち棄てられようとしている。文学と風土との關係はまさにかかる文学の非合理的な面の一つである。

文学はもとより心の所産、しかも重要な所産のひとつであり、また人間の「心」は風土に、大地に離れがたく結びついたものである。心と大地との關係を逸早く理論的な形で捉えて見せたのはC・G ユングであった。(理論的にはなく、直観的にこれを捉えるのはなかなか芸術であり、芸術や文学がいかに太い紐帯によって風土に結びつけられているかを示すことが、岡田喜秋さんのこの労作の根本主題であることはいうまでもない。) ユングは一九二七年の「心と大地」という講演中にこういっている、「アメリカ人は、ニグロの生活態度とインディ

アンの心を持つヨーロッパ人であります。彼はよその土地を占領した者が必ず嘗めなければならぬ運命を嘗めつつあるのです。あるオーストラリアの土人はこういっています、〃よその土地を奪うことは出来ないものだ。なぜなら、よその土地にはよその祖先の霊が住んでいるからだ。だから新しく生れる者は、よその祖先の霊の姿をして現われるだろう〃

このオーストラリア土人の言葉は古めかしい響きを持ち、現代人の耳には無知なる者のたわ言として響くかもしれないが、ユングが詳細に指摘しているアメリカ人の生活態度に見られるニグロ性に想到する時、われわれは古めかしさが決して真理の存在せぬことの証拠ではないことを悟らざるをえない。世界は狭くなり、空間と人心性との結びつきは一見益々稀薄になって行く。一種の「国際人間」が誕生しつつあるようにさえ見える。事実またわれわれは、われわれの意識面では土地、空間、風土というものを益々軽視するようになってきた。そして土地や空間や風土に深いつながりを持つ心の部分は無意識化しつつある。そしてこの部分はわずかに芸術や文学によって自己表現の機会を得ているわけなのだが、不当に無意識化させられたものは、いつかは意識に対して、つまり人間に対して、人間の社会生活に対して忌むべき形式での復讐を企てずにはおかぬだろう。

詩人が身を以て知り、ユングのような学者が鋭い悟性の洞察によって捉えた心や文学と風土や大地との関係を、今や岡田喜秋さんのこの特異な労作は改めて確認しようとするのである。出ずくして出づることのなかった研究であり、今日の文芸評論や文学研究の合理主義的偏向を修正するのにきつと大きな役割を果たしてくれると思う。むかし「文学における風景の諸問題」という小論文を試みた私にとっては、岡田さんの論稿は大いに歓迎すべき労作であり、これによって新しい人たちの文学を眺める眼に新しい角度が与えられるだろうことを確信する。

オスカー・ワイルドに「人生は芸術を模倣する」という言葉があるが、その芸術はまた風土の心の自ずからなる眩きでもあるのだ。

昭和三十一年八月下浣

高 橋 義 孝

目次

風土と文学の關係

高橋義孝

石川啄木と円錐火山

——自然美と宗教について

10

宮沢賢治と不遇な大地

——科学的風土觀の到達点

23

島崎藤村の異国体験

——海と精神の交流

43

室生犀星のふるさと感覺

——望郷と棄郷の秘密

55

志賀直哉と地方都市

——生活環境と創作行為

67

太宰治の郷土愛

——デカダンスの免罪符

85

宇野浩二と山岳美

——自然美への感動と麻痺

95

佐藤春夫と「田園」

——憂鬱の本質について

109

川端康成の自然描写

——自然と人間の合一

123

梶井基次郎と心象風景

——見えない色彩感覚

135

堀辰雄における「西欧」と「日本」

——西欧文学移植の問題

145

谷崎潤一郎の関西讃美

——生理を反映させた生涯

167

大岡昇平のジャングル体験

——水という存在をめぐる

井上靖における「風」と「月」

——さめた人生観の美学

遠藤周作と「キリストの土地」

——汎神論的風土への挑戦

岡田喜秋・年譜

あとがき

177

191

205

219

226

石川啄木と円錐火山

——自然美と宗教について——

啄木の文学を論じる場合、いままでは、たいてい社会主義思想家としての彼や、放浪の旅をつづけて生きた詩人としての研究が数多くおこなわれている。しかし、私はいま、この二つの面をとらない。岩手の風土に生れ、浜民村という北上川のはとり、岩手山のふもとの大地に生れたひとりの人間として考えてみたいのである。詩人や社会主義思想家である以前に、彼の内部にあったはずの日本人の血液というものを考えてみたい。その生地が岩手山という美しいコニーデ火山の山麓であったということは、彼の生活に重要な関係がある。なぜなら、ふるくから、日本人はそうした美しい山にたいして、感度をしめしてきたはずであり、彼もまたその例にもれず、この山に強烈な愛情をそそぎ、彼が岩手山と相対するとき、いかにも日本人らしいひとつの感性があらわれているのを、はつきりと彼の文学の中に見ることができからである。

美しい円錐型の火山の存在が、人間のところにどのような感じをあたえたか、それは古くからひとつの問題である。歐洲の山岳美の代表であるアルプスのように、地殻の皺曲作用によって聳える岩山は日本にはすくなく、日本の山の特色はたいてい、富士山型のコニーデ火山である事実注目したいのである。

その証拠には、万葉のむかしから、人がことさらに目にとめた山は、歌にもはつきり現われている。現在では、有名でなくとも、あの万葉時代にすでに歌にふみ込まれた山に、大和の三輪山があり、三笠山（若草山）があり、東国でも筑波嶺（筑波山）がある。もちろん、富士山はいうまでもない。しかし、考えてみると、これらは不思議と、みなコニーデの円錐火山——少くとも、これら全部が火山噴出によって生れたものでないにしても、形は

一様に、円錐型をした柔かな感じの独立峰なのである。

つまり、それらの山々は山麓のどこからでも大きく仰げることが特徴である。雲で頂がかくれることはあっても、晴れた日なら、四方からその姿はいやでも仰ぐものの視界に入る。

ヒマラヤやアルプスのように、連峰をなしていない場合、山の存在は、孤高なそしてある不動な存在を、感じさせる、と美学者はいったが、山は尊大にして、語らざるある未知なもの、人間を超越して、沈黙の脾腕をつづける神秘的な存在ともなることがある。たとえば、それは富士山に対する日本人の過去の感覚をみても、はつきりとわかることであろう。

啄木が心にとらえた浜民村郊外の岩手山もそれと同じケースである。少くとも、同じ岩手県にいく人かの有名な文学者が輩出していても、彼ほど、心の中で岩手山を強くかんじとったものはない。しかも、それは山に登って、山を知るというかたちをとらずに、一山麓生活者として、素朴につよくその存在を受けとったという点に、独自の自然美の感受の仕方があったのである。

いいかえるなら、そこに日本の文学者のひとりが日本の山に対して、どのような感じ方をしたか、つまり、山という大自然の一具象物に対して、ある文学者がどのように感じたか、ということがはつきりとわかるのである。そして、それが啄木ひとりの自然観や山岳観の問題をこえて、日本人の一般の自然に対する態度を知るのに役立つのである。しかも、啄木のこの自然美に対する感受の仕方を、同じ岩手県に十年後に生れた宮沢賢治の岩手山観とくらべてみれば、さらにはつきりとひとつの態度が説明できるように思える。つまり、宮沢賢治は一人の自然科学者であったということ、啄木は科学とは無縁な一文学者であったという事実を考えてみる場合、この二人の岩手山観には、当然大きな違いがある。ここで、問題は、一個の山ということではなくなり、自然美に

對する日本人の心的態度を知ること、この論考の方向はむけられるのである。

II

まず、岩手山と啄木の生活の關係は、先にいったように、この山の麓、しよたみむら波民村に生れたことよつて始まる。ここは北上川のはとり、位置的には西方に岩手山の円錐火山が村のどこからでも眺めることができる。この岩手山と相對して、東方に、岩手山より少し低い、同じように美しいむすね姫神山が聳え、いわば波民村はちょうどこの二つの火山を左右に仰ぐ山岳展望の好地である。そこで生れた啄木が幼少のころから、いやすう嫌になしにこの二つの山を仰いで、そのすがたを心にふかく刻みつけてきたことは、うなずかれることであらう。啄木より十年あとに生れた宮沢賢治が同じ盛岡中学にまなび、同じく詩人とよばれる人間になつたとはいへ、啄木の方は、賢治とちがつて、一度も岩手山自体に登つたことはなかつたのである。登つてみて、山を味わうというのとはまったくちがつ、啄木はそうした大自然にとりまかれた環境から、一日も早く都会の奔流のなかへ出て、華かに文学の世界で活躍する自分を夢みたのである。

たとえば、中学校において啄木より、一年先輩の及川古志郎が同じこの山国から出て、海に憧れて、海軍軍人を志したことも幼い中学生のころの彼に大きな刺激をあたえたともいえようが、それから暫くたったところは、當時の中央文壇で活躍した藤村や花袋に羨望感をいだいて、更に、なんとかして、東京へ出て一旗あげたいと切望したのである。その當時の彼をみると、弱冠十七歳の秋、歌誌「明星」にのつた歌一首が彼を有頂天にさせ、即時中学を放棄して、最初の無暴な上京をこころみてさえる。結局、これは父によび戻され、翌年は居たたまれ

ず、今度は北上して、北海道へと放浪し、十九歳には、三度目の上京を決行し、こうして幾度かの離郷生活のあいだに、彼のころのなかには、ふるさとというものの実態が、次第に強烈にクローズ・アップされていったのである。そして、二十歳の五月、処女詩集「あこがれ」をいだいて、東京を去るときの気持は「ふるさとの閑古鳥を聴かんとして……」やむにやまれぬものがあつたと自ら語っているが、このときから、さらに、ふるさとの自然美は新たなかたちで彼のところに刻まれはじめたのである。

III

生涯で最後となった東京生活をはじめて、一年目の二十六歳の年（明治四十四年）、「一握の砂」を出した直後のある夜、彼は本郷三丁目の停留所に立っていたとき、突然インバネスに手を突こんだまま、まざまざとふるさとの渋民村と江釣子村の風物を想い出たと、告白する。彼はそれを京都にいる友人、瀬川潔にあてて書いた手紙の中ではつきりと語っている。いろいろ考えたが、結局、「岩手は第一の故郷、北海道は第二の故郷だ」と。

思うに、あれほどはげしく東京をあこがれた彼も、本質的に東京人になり切れなかったのである。あれほど東京をあこがれ、都会を生活の舞台にしたいとねがいがながら、けつきよくは、都会にあつて、ふるさとをつねに意識の底で夢みていたことがわかる、友人に対する吐露はしばしば率直であり、偽りが無い。彼のこの手紙の告白もそうである。進歩的な彼は、日本的な思想の短をなじり、クロボトキンの「ゼ・テアラ・イン・ラシア」をよんで、友人、岡山儀七にあてて、ロシアの社会主義思想の感想をかき送るその一方で、いかにも、日本人らしい感傷に溺れているのである。

二日前に山の絵見しが

今朝になりて

にはかに恋しふるさとの山

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし

これは「一握の砂」にうたわれた都会生活者の郷愁のあらわれである。ごく自然な郷土への情愛である。この瞬間、彼の脳裏にはあのコニーデ型の雄大な火山のすがたが色彩をともなつて、浜民村の背後に浮びあがっていたのである。彼は素直に、そんな郷土の風景の前に感動できたのである。

この感動を情感ゆたかな歌人の吐露するものとして当然だというもよい。しかし、この瞬間、彼は決して、素直に「山」は神のごとき親しみのある存在——とは考えていないことに注目しなければならない。その当時、「少くとも小生の性格は今の東京には適せず、小生は文界の軌道を歩むを以てこの上なき不得策なりと感じ」（小笠原迷宮にあてたる書簡）はじめた彼がふるさとの山河をいとおしみ、

浅草の夜のにぎはひに